

万葉集 難訓歌を

明快に解く！

朝倉慎一

# 目次

まえがき	3
各歌の問題点と、解決案の概要	4
額田王の莫囿圓隣歌の試訓と意識の提案（巻一・九）	9
中大兄の大和三山の歌の別解釈の提案（巻一・十三）	34
額田王と井戸王の三輪山の歌の別解釈の提案（巻一・十七）	72
高市皇子の三諸の歌の試訓と意識の提案（巻二・一五六）	95
持統天皇の燃火と向南山の歌の試訓と意識の提案（一六〇）	117
参考文献	150
あとがき	156

## まえがき

二〇二五（令和七）年現在、万葉集には、未解決の難訓歌や、解釈の定まらない歌が、いくつか残されています。本稿は、千三百年以上も未解決だった謎の、『明快』な解決案を示します。従来の曖昧な大意の解釈とは異なり、

本稿は、『簡潔』なのに『具体的』で、『明確』かつ『詳細』、『歴史と符合』するので、『説得力』のある解釈になっています。各稿の詳細は、独立した論文形式になっています。どれも、「本邦初」です。

『明快』な『謎解き』を、お楽しみください。

## 各歌の問題点と、解決案の概要

### ・額田王ぬかたのおほきみの莫囂圓隣歌ばくごうえんりんか（巻一・九）

問題…最初の二句『莫囂圓隣之 大相七兄爪湯氣』が難訓で、諸説があり混乱しています。当然、詳細な意識はありません。解決…鍵となる『表意兼ひょういけん表音文字ひょうおんもじ』を提案します。

試訓と、「明確に意味が通る」、全文の意識を提示します。

題詞に沿う、温泉の『湯氣ゆげの文脈』で、

「有間皇子ありまのみこの亡なき面影おもかげを、湯氣ゆげに映うつして、昇天を想う歌」であることが判明します。

・ なかのおほえ やまとさんざん 中大兄の大和三山の歌（巻一・十三〜十五）

問題…三山を男女の色恋に喩え、その性別論争が続いています。

また、第二反歌には『反歌に似ず』（似つかわしくない）の

注釈があり、長歌や第一反歌とは無関係だと思われています。

反歌とは、長歌の意を反復、補足、または要約する歌です。

解決…『高山』に『かぐやま』の訓が付けられたこと自体が、

「そもそもの間違い」だとし、素直に『たかやま』と読みます。

そこから「全て」が導き出され、性別と注釈の問題を解決し、

「全てに『整合性』が有る結論」を得ます。

長年にわたり、三山の性別論争が続いてきたが、もしも本稿が

妥当ならば、この論争に「終止符」を打つことになるでしょう。

・額田王と井戸王の三輪山の歌（巻一・十七〜十九）

問題…十九番歌の和歌（唱和する歌、応じる歌、和ふる歌）には、

『和ふる歌に似ず』（唱和する歌として似つかわしくない）

の注釈があり、長歌や反歌とは無関係だと思われています。

解決…『三輪根麻呂』の仮説を提案し、陰の『偲ぶ文脈』を

導入します。長歌と反歌の、陰の意識が重要な先導となります。

和歌に、陰の『三輪伝説の文脈、かつ偲ぶ文脈』を追加し、

末尾の「『勢』は『姿』」とすることによって、

和歌が陽陰で明確に唱和します。つまり、

『和ふる歌に似ず』が否定され、明確に解決されます。

三首は陰に「亡き三輪根麻呂を偲ぶ歌」であることを示します。

・高市皇子の三諸の歌（卷二・一五六）  
たけちのみこ みもろ

問題…『已具耳矣 自得見監乍共』が難訓で、諸説があり、混乱しています。当然、詳細な意識は、ありません。

解決…人の死に際して「当たり前」の、「字義訓読」を示します。

「誤字の仮定」があり、『已』ではなく、『己』を使います。

目から鱗うろこの訓読で、今まで誰も言及げんきゅうしなかったのが不思議です。

訓読を読み下し文にするべく、『表意兼表音文字』ひょういけんひょうおんもじを使うと、

難訓部分は、「驚異的」な「多重」の掛詞になっていて、

「十市皇女の自殺とをちのひめみこを示唆しき」しきしており、

「慟哭どうこくの歌」であることが判明します。

・持統天皇の燃火と向南山の歌（巻二・一六〇、一六一）

問題…『面智男雲』が難訓であり、歌の意味も「火を包んで袋に入れる」で意味不明です。『向南山』にも定訓はありません。

『向南山』も『星』も『月』も、真意が何なのか不明です。

解決…『八面智』は、天武天皇陵の『八角墳』と仮定します。

『向南山』は、『南向きの天皇陵』と仮定し、

天武天皇陵と草壁皇子の岡宮天皇陵の、二つの陵とします。

燃火の歌は、『八角墳』に眠る天武天皇の成仏を願った歌です。

向南山の歌は、天武天皇を『星』に、草壁皇子を『月』に喩え、

二人の成仏を天皇陵の『雲』（霊）に喩えた、別れの歌です。